

ハーバートの詩

船木満洲夫

本稿はジョージ・ハーバート (George Herbert, 1593—1633) の詩集『聖堂』(*The Temple*, 1633) の主要部を成す「教会」(*The Church*) から作品を選び、彼の詩の特性を個々に確認しておこうというものである。それぞれの制作の時期が不明なので、とり上げるのになんらかの連関を保つ必要があるだろうし、拙稿におけるその順序自体が、論点のアクセントのおきどころを物語ることになるかもしれない。人間の罪と神の愛がハーバートの中心テーマで、苦しみ、死、復活、それに詩と生き方の問題などが関ってくるであろう。詩の虚構と信仰の真実がどうかかり合うのか、これが筆者の特に興味をもつ点であり、作品の話者イコール作者のハーバートでは必ずしもないということを最初に記しておきたい。

「教会」の冒頭に位置する「祭壇」(*The Altar*) は、議論の多いエンブレム詩 (図形詩)。詩法は複雑で宗教性は低いとの評言¹⁾ は否定できないであろう。「主よ、砕けた祭壇をあなたの僕 (しもべ) は造ります／心を材料とし涙でうち固めて」(*A broken Altar, Lord, thy servant reares, / Made of a heart, and cemented with teares*) と歌い出す。聖書の典拠 (「詩篇」第51篇17節²⁾) からして 'broken heart' は納得がいくが、神に対して 'broken Altar' を建てるのは適切を欠くのではないか。'hard heart' は涙と結びつかず、神の賛美の趣旨にはそぐわないのではないか、祭壇を建てる詩人と石工の神との関係がすっきりしないなど、短詩にしては基本的な疑問がいくつか残るのは確かだ。聖書の拘束が強過ぎて (上記以外に「申命記」第27章5-6節、「出エジプト記」第20章25節、「ルカ伝」第19章40節)、詩が一貫した展開の機能を果たしていないようだ。主に対する僕 (しもべ) の *humility* の姿勢と、主の「犠牲」(*Sacrifice*) を 'mine' とし、この祭壇を 'thine' としたまえとの末尾の祈願に、ハーバートのねらいを読めば足りるだろう。

キリストの十字架の受難が、「感謝」(*The Thanksgiving*) で問題的に扱われる。「だがそれでどのようにあなたをまねし、そして／血まみれだが清いあなたの手に倣いましょうか？」(*But how then shall I imitate thee, and / Copie thy fair, though bloudie hand?*) と、キリスト教者の本質的な問いが提示される。これがキリストの愛と勝利を競ううわっ調子の意気込み、結構づくめの態度表明の中に失せてゆく (自分の詩と聖書に言及するときは真意をほめめかすが)。キリストに倣うのと実際との隔たりが明白であり、キリストの「受難」(*passion*)

に途中で話が及ぶとあと回しにし、最後にこの主題に直面して口ごもり、すべてが停止せざるを得ない。これは無言の畏怖と究極の限界点での humility を示すものであろう。ただこの世の苦難と敗北を通して永遠の勝利を得るのが、キリストの受難の教えるところだとすれば⁹⁾、このつまずきの可能性が信仰の出発点として厳然ととどまるはずであり、キリストの範例にどう従うかが残された課題となろう。

「苦悩(I)」*Affliction* (I) はハーバートの挫折感を表現した自伝的色彩の濃い作品。人生の浮き沈みに気まぐれな神の業を見る詩人には、喜びも悲しみも全く受け身の経験であった。神が誘いの手を伸ばしていた最初のころは喜びが仲間だったのに、年が経つとはびこってきた悲しみが魂のすべてというふうに逆転し、病気につづいて友人の死、公的生活や学問生活の不如意へと、神は強暴さ狡猾さを発揮したと、詩人は旧約(例えばヨブ)を思わせる激しさで神を責めるのである。

Thus doth thy power crosse-bias me, not making

Thine own gift good, yet me from my wayes taking.

〔こうしてあなたの力は私の意向をわきへそらし、ご自分の賜物を／活用はなさらず、しかも私を私なりの歩みから離れたもう〕

このように自分の目標に逆らう暴君のような神を相手にしてきた詩人は、回顧から展望に転じて自我のない存在を夢想してみる。

Now I am here, what thou wilt do with me

None of my books will show:

I reade, and sigh, and wish I were a tree;

For sure then I should grow

To fruit or shade: at least some bird would trust

Her household to me, and I should be just.

〔今私はこうしていて、あなたが私をどうなさるのか／どんな本も教えてはくれません／私は本を読み、ため息をつき、自分が樹木であればと思います／そうであればきっと大きくなって／木の実や日陰ができるでしょうから。少なくともその所帯を／私に預ける鳥もいるでしょうし、私も誠実にその任を果たすでしょう〕

ゆきづまった詩人は推測をもてあそぶのだが、樹木との間には現実的な類似点は認められない。

Yet, though thou troublest me, I must be meek;

In weakness must be stout.

Well, I will change the service, and go seek

Some other master out.

Ah my deare God! though I am clean forgot,

Let me not love thee, if I love thee not.

〔だが、あなたが私を苦しめても、私はおとなしくせねばならず／弱いのに頑強でなければなりません／そう、私は勤め先を変えよう、そして／だれか別の主人を探しに行こう／ああ、いとしい神よ！ 私がすっかり忘れられようとも／私が心からあなたを愛するのでなければ、私にあなたを愛させないで下さい〕

引っこんだり反抗にもどったり心の揺れを表現し、最後の口ごもるような愛の誓言に、この詩のすべてを要約しているようだ。過去と未来との平衡の上に、神の愛のない虚無を意識しつつ、話者は神との関係における主体性をかろうじて保っていると言えよかろうか。このことは話者が初めから、反抗の成り行きについて完全に認識しているとの解釈⁴⁾に同意した上でのことだが。

最も暗い作品に属する「悲惨」(*Miserie*) も神に話しかける形をとるが、最終行で自分のことだと認めるまでは、人間一般の愚かさや罪の論議で神の愛の関与にも及ぶ。「彼らはあなたのあら探しをし、あなたに仕えるための／契約を破棄しようとする。しかしあなたの愛が／その契約を保持させ、彼らの愚行を／柔和な鳩の翼でおおい／あなたの敵になろうとする者たちに／それを許したまわぬ」(They quarrell thee, and would give over / The bargain made to serve thee: but thy love / Holds them unto it, and doth cover / Their follies with the wing of thy milde Dove, / Not suffring those / Who would, to be thy foes) と。この詩には人称代名詞の混乱が見られ⁵⁾、最後に「神よ、これは私自身のことです」(My God, I mean my self) とうち明ける。外側に立って話してきた詩人がこのようにささやき声で明言するのは、人類の墮罪を自らのものと受けとめる意味があろうし、ハーバートが没個性の客観的存在となる伝達形式を用いていることを、おのずから証するものでもあろう。

神と論議を交わす「対話」(*Dialogue*) では、話者は自分にとりえのないことを強く申し立てる。「しかしそういうご好意に通じる／どんな長所も私にあるとは思えず／同様にそのご好意にかなうようにする道は／私の理解の限度を超えています／その上ご好意の動機はあなたのものですが／同様にその道は全く私のものではありません／私は取り引きのすべてを拒否します／罪が拒否し、私が断念します」(But as I can see no merit, / Leading to this favour: / So the way to fit me for it / Is beyond my savour. / As the reason then is thine; / So the way is none of mine: / I disclaim the whole designe: / Sinne disclaims and I

resigne) と。ところがキリスト自らの 'resigning' と受難に倣うようにとの話に、話者はもはやあとに退くこともかなわず、「ああ／もうやめて下さい。お言葉に私の胸は張り裂けます」(Ah! no more; thou break'st my heart) とさえぎる。両者の 'resigning' が比較を絶することの劇的な表現であり、詩的虚構の装いが宗教的真實の前にうち負かされたことを示す、そういう内省的対話と解することができよう。限界点で破裂する自己吟味の心理描写は、神との関係の一樣でないことを思わせる。

「あがない」(*Redemption*) はバラブル形式のソネットで、話者の小作人が領主を探す日常的な平面の話の末尾に、キリストの十字架上の死が劇的に照らし出される。

Having been tenant long to a rich Lord,
 Not thriving, I resolved to be bold,
 And make a suit unto him, to afford
 A new small-rented lease, and cancell th' old.
 In heaven at his manour I him sought:
 They told me there, that he was lately gone
 About some land, which he had dearly bought
 Long since on earth, to take possession.
 I straight return'd, and knowing his great birth,
 Sought him accordingly in great resorts;
 In cities, theatres, gardens, parks, and courts:
 At length I heard a ragged noise and mirth
 Of theeves and murderers: there I him espied,
 Who straight, *Your suit is granted*, said, & died.

〔長らくある豊かな主の小作人をしていたが／はかばかしくないので、厚かましくも私は／主にお願いしようと心に決めた、新しい安い地代の／借地契約をして、古いのはとり消してもらおうと／天上の館に私は主をたずねた／その人の話では、主は最近ある土地の件で／出かけたとのこと、ずっと以前に地上に／高い値で買ってあったのを、実際に入手しようと／私は直ちに引き返した、そしてその高貴な生まれを知っていたので／立派な人たちのよく行く場所に主を探し求めた／都市、劇場、庭園、獵園、宮廷などに／ついに私は耳にした、盗人や人殺しどもの／耳ざわりの叫び声やはしゃぎ声を。そこに私は主の姿を見つけた／主は即座に「願いは聞きとどける」と言われると、亡くなられた〕

話者の探索には、旧約（ユダヤの律法と契約）から新約（キリストの恩寵）への変更の寓意

が含まれているらしい⁶⁾。この詩の主役は背後のキリストで、その発見とともに詩の虚構は突如として消滅し⁷⁾、すばやい恩寵の与えられ方と十字架上のキリストの死の不可解さが、遅鈍な話者の挫折の状況を超えて沈黙の中へ拡がる。自然の理に反するキリストの死のあがない、その劇的現在化をここに感じさせずにはおかない。「ロマ書」第5章8節⁸⁾の説く通り、キリストの死は罪人への神の愛の啓示であった。

キリストの復活を主題とした「復活祭」(*Easter*)は、韻律の異なる二つの部分から成る(あとの部分がハーバートによって大幅に改められた)。冒頭は「詩篇」第57篇8節に拠りながら(次の連のリュートへの呼びかけも同様)、そこに出る‘awake’を‘rise’に移し変えて、その‘rise’を人間の目覚め、キリストのよみがえり、人間の精神的再生の三通りの意味に巧みに使い分けている⁹⁾。つづく錬金術のイメージは知的なコンシートであるが、第2連で十字架上のキリストの身体を、木のリュートに張った弦になぞらえるのは、キリストの苦痛に対する共感の意味はあるとしても、知的な遊びのゆき過ぎの感を免れない。第3連で人間の精神的再生が、リュートの指南役のキリストによって実現されることが鮮明になり、そして「おお、あなたの聖なる霊にも歌曲の一部を受けもたせて／その美しい技でもってわれらの欠点を補わせたまえ」(O let thy blessed Spirit bear a part, / And make up our defects with his sweet art)と運ぶ。その歌曲の具現がつづく第2部であり、中心的な象徴の太陽が日と連結して、キリスト復活のような日はないと強調し、「あるのはただ一日だけ、この一日がいつまでもある」(There is but one, and that one ever)と結ばれる(‘one’が‘Sun’‘Son’と韻が合う)。一度だけ死人のうちよりよみがえった神の子は、二度と没することがないという信仰の宣言である。

ハーバートの2編のうちのもう一つのエンブレム詩「復活祭の翼」(*Easter-wings*)は鳥の翼を型どったもので、1, 2連ともに最初の長い行が行ごとに短くなって、5, 6行が最も短く、再び長さを増して最後の10行で最初と同じ長さにもどる。人間の状態に応じて次第に貧しくやせ細り、キリスト復活の賛美と再生の祈願とともに救済へと高く飛ぶ運びである。第1連は「創世記」の人間の創造と墮落を述べ(後半から三人称が一人称に変わるの、アダムの罪を自分のものと受けとめようとする姿勢の表われ)、人間の墮落の結果のキリストのあがないによって、墮落が逆説的に救済の機縁となることを表現する——「そのとき墮落が却って私の飛翔を進めるだろう」(Then shall the fall further the flight in me)。第2連は詩人個人のことに触れ、キリストの勝利を歌うだけでなく、それを身をもって感じさせてもらいたいと願い、受難の後に復活したキリストと一つになることで、苦悩が逆説的に再生のきっかけとなることを強調する——「苦悩が却って私の飛翔を推し進めるだろう」(Affliction shall advance the flight in me)。このようなそれぞれの最終行における詩的エネルギーの放出は、信仰の力強さに比例するものととれよう。

祈りに関する定義を試みたソネット「祈り(I)」*Prayer(I)*は隠喩の羅列から成る。人間と

神との関りを最初の4行では、キリスト教の教義に従って平静にイメージ化しているのに、次の4行になると神への反抗の激情が荒れ狂い、地上の人間の立場からの攻撃的なイメージに急転する。この不一致が、つづく6行で新たな平穏な調べの隠喩のもとにおさまる。祈りは「柔和、平安、喜び、愛、至福／天に昇るマナ、至上の歓喜／平服の天、正装の人間／天の川、極楽鳥／星を越えて聞こえる教会の鐘、魂の血／香料の国、それと理解されるもの」(Softnesse, and peace, and joy, and love, and blisse, / Exalted Manna, gladnesse of the best, / Heaven in ordinarie, man well drest, / The milkie way, the bird of Paradise, / Church-bells beyond the starres heard, the souls bloud, / The land of spices; something understood)と歌うのである。この詩のおよそ半分ぐらいが、聖書のイメージに基づいていることが指摘されているが¹⁰⁾、‘Gods breath’ (l. 2) の1行にアダムの生まれ変わりの意味を含め、‘Reversed thunder’ (l. 6) など、聖書では神のものであるのを人間のものに変え、上記の‘Exalted Manna’ (l. 10) の形容辞に天に上げられたキリストを暗示したり、ハーバートなりの想像力が働いて、地から天に通う祈りの方向性が詩的増幅を得ていると言えよう。ところが末尾の‘something understood’の2語は、隠喩によるこれまでの祈りの定義が意義を失うと思われるほどの重みをもつ。これがこの詩全体の到達点であり、時間を超えたこの真実の照明とともに詩は沈黙する。

最初の願望の表明が結論でどう一変するか、「気性(I)」または「調節(I)」*The Temper* (I)はその手順をよく示している。題名は気性のほかに鋼の鍛え、楽器の調律の意も含む。最初の連では神の賛美と引きかえに感情の常時の高揚が得られることを望み、次の連で感情経験の多様な分裂を宇宙空間に拡大してみせる。3, 4連では天国から地獄まで計り知れぬ空間を延び縮みさせる拷問者・神への苦情に、機知を利かせながら *humility* の姿勢をあらわにし、5連では *humility* をさらに徹底させて、神の屋根の下に鳥のようにかくまわれたいとの願望を述べる。この願望を6連では放棄して神の意志に委ね、神に調律師の役割を帰して、音楽の隠喩を神の賛美とうまく結びつける。これがさらに宗教的に内面化されて、最後の7連は「私が天使と飛ぼうと、塵とともに落ちようと／あなたの手が両方ともお造りになったのだし、私はその中にいます／あなたの力と愛、私の愛と信頼で／一つの場所があらゆる場所になるのです」(Whether I flie with angels, fall with dust, / Thy hands made both, and I am there : / Thy power and love, my love and trust / Make one place ev’ry where) と締めくくる。こうして宇宙空間を激しく上下に延び縮みした後、この詩は常に現在する‘ev’ry where’に平衡を得ることになる¹¹⁾。冒頭からの自我の発展、詩と信仰の結合によって、神の力と愛、人間の愛と信頼、これが一つになって時空の超絶が実現することが指し示されたわけだ。

ここでハーバートが自らの詩の立場を吐露した作品を一瞥しておきたい。まず「ヨルダン川(I)」*Jordan* (I)。ヨルダン川はイエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けた川であり、またユダヤ人たちが約束の地に至るために渡った川でもある。従って題名はヘリコン山からヨ

ルダン川への転換、詩歌の新出発と罪の浄めを含意するにちがいない。「作りごとと髷（かもじ）だけが詩にふさわしい／と言うのはだれか？ 真実の中には美はないのか？／よい構造はすべてらせん階段にあるのか？／真実の椅子ではなく、塗り飾った椅子に／敬意を表しないならば、詩歌は通用しないのか？」(Who says that fictions only and false hair / Become a verse? Is there in truth no beautie? / Is all good structure in a winding stair? / May no lines passe, except they do their dutie / Not to a true, but painted chair?) と詩人は疑問を呈する。‘truth’ というのはハーバートの場合、宗教を離れては考えられないし、彼が誠実な信仰の詩を高く掲げていることは疑いない。手のこんだ恋愛詩や寓意的な田園詩に反対する詩人は、最後に「わが神、わが王、と率直に言う」(plainly say, *My God, My King*) 自分の立場を主張する。単純で簡明なのはハーバートの詩の特色であるが、だからと言って虚構を排除してはいない。虚構から解き放たれるのは、むしろ最後に信仰の真実がとって代るときだ。この作品では、生き方の厳しさが優先して詩法の考え方を窮屈にしている感がぬぐえない。フィクションの意味も、精神的な視点から狭く限定されているように思われる。

自らの詩歴を回顧する「ヨルダン川(Ⅱ)」*Jordan(Ⅱ)*では、「天上の喜び」(heav'nly joyes)の輝きを表現する言葉や創案を探し求めて、「純真な意図を隠喩の巻き毛で装い／まるで売りもののように、その意想を飾り立てた」(Curling with metaphors a plain intention, / Decking the sense, as if it were to sell) とうち明ける(‘plain’に注意)。そして「自分の我をその意想に織りこんだ」(did I weave my self into the sense) のだが、そのうちに友の声がある／この長ったらしい気どりはなんと的はずれか！／愛の中にこそすでに描かれた美しさがある／そのみを写しとり、むだは省くがよい」(*How wide is all this long pretence! / There is in love a sweetness readie penn'd: / Copie out onely that, and save expense*) とささやくように思ったのである。この友はキリストで、愛のみを‘Copy’せよとは聖書のキリストの愛に倣うことと解するのがよいであろう。ハーバートの『聖堂の司祭』(*A Priest to the Temple, or, the Country Parson*)では、‘ready penn’d’を説教の修飾句にした個所があり¹²⁾、また前記の「感謝」でキリストの手を‘Copie’すると語られていたことが想起されよう。従ってこの作品は、詩の書き方よりも生き方に焦点が移り、‘long pretence’も表現上のことよりは、心あるいは知的高慢に対する自己批判ととれる¹³⁾。詩法上の虚構の装いはハーバートの詩には普通のことだし、その否認ではなくて、詩を書くにも聖書の愛に従うべきだという主張だ。この「ヨルダン川(Ⅱ)」自体が、自己の表出を避けながら虚構の論議から転じて、真実の照明(ここではキリストの声)による沈黙に終結する、そういうハーバートの詩の特性を暗示しているであろう。

「徳」(*Vertue*)は彼の簡明な非個性的な詩を代表する一つで、時間と死の超越を主題とする。

Sweet day, so cool, so calm, so bright,
The bridall of the earth and skie:
The dew shall weep thy fall to night;
For thou must die.

Sweet rose, whose hue angrie and brave
Bids the rash gazer wipe his eye:
Thy root is ever in its grave,
And thou must die.

Sweet spring, full of sweet dayes and roses,
A box where sweets compacted lie;
My musick shows ye have your closes,
And all must die.

Onely a sweet and vertuous soul,
Like season'd timber, never gives;
But though the whole world turn to coal,
Then chiefly lives.

[うるわしい日よ、涼しく、穏やかに、うららかな／地と空の婚礼の日
よ／今夜お前の落日を露が涙して悲しむだろう／お前は死なねばならな
いから／うるわしいばらよ、お前の赤くて見事な色は／思慮もなく眺め
る者にその眼をめぐえと命じる／お前の根は常にその墓の中にあり／お
前は死なねばならないのだ／うるわしい春よ、うるわしい日とばらに満
ち／香料のぎっしり詰まった箱よ／私の楽の調べはお前にも終止がある
ことを示す／すべては死なねばならないのだ／うるわしく徳のある魂だ
けが／よく枯れた材木のように、反ることがない／そして全世界が炭
(燃えがら)と化しても／とりわけて生きるのだ]

単純だが各行ごとに意表をつく展開には彫琢の手が感じられる。第3連まで「日」「ばら」「春」の外観上の美しさを描きながら、日は夜露とともに没し、ばらは常に墓に根をつけ、春の終止は詩の調べが教えるという、それぞれの3行目の消滅の描写が、4行目で一般的な死の真実として結論される。3連目では「日」と「ばら」が「春」に統合され一つの箱に圧縮され、'My musick'で人間の時間が関ってきて、こうして'thou'が'all'に変わるまでに、反復

強調によって死の不可避性が加速されているのが注目される。この詩はミニ自伝で、詩人自身の無心、情熱、青春が消え去るのを惜しんでいると見る解釈¹⁴⁾もあるがどうであろうか。最後の連で有徳の魂が躍り出て（形容辞の 'sweet' は「魂」を「日」「ばら」「春」と対比的に結びつける）、「枯れた材木」の直喩と最後の審判の日への言及で、時間と死を超えた永遠の生の秩序の中におさまる。死が信仰の根本に関する問題として表現を得ていると言ってよい。

「生命」(Life) では「徳」と同じく死について思考をめぐらす、人生の象徴の花が感覚的に意味づけられ、哀歌と呼んでよいほどの調子がただよう。

I made a posie, while the day ran by:

Here will I smell my remnant out, and tie

My life within this band.

But Time did becken to the flowers, and they

By noon most cunningly did steal away,

And wither'd in my hand.

My hand was next to them, and then my heart:

I took, without more thinking, in good part

Times gentle admonition:

Who did so sweetly deaths sad taste convey,

Making my minde to smell my fatall day;

Yet sugring the suspicion.

Farewell deare flowers, sweetly your time ye spent,

Fit, while ye liv'd, for smell or ornament,

And after death for cures.

I follow straight without complaints or grief,

Since if my sent be good, I care not if

It be as short as yours.

〔日が過ぎてゆく間に、私は花束をこしらえた／ここに私の余生をかぎ出し、そして私の生命を／この花束のうちに結ぼうと／しかし時が花を手招きすると、花は／真昼までにこっそり忍び去り／私の手の中でしぼんでしまった／私の手が花に一番近く、次いで胸が近かった／私はそれ以上考えることなく、善意に／時のおだやかな戒告を受けとった／時は実にやさしく死の悲しい味を伝え／私の心に私の最期の日をかぎとらせてくれた／しかも気がかりは甘く和らげて／さようなら、いとしい花

よ、美しくお前たちは生涯を過ごした／生きている間は、香りや飾りに
ふさわしく／そして死後は薬用にふさわしく／私は不平も悲しみもなく
すぐにあとを追おう／私の香りがよければ、たとえお前たち同様に／短
くとも私はかまわないのだから]

1 連と 2 連で花の生命のはかなさに詩人は反応し、その花を招き寄せた時間が詩人に訓戒を与える（死の味を甘く和らげるのは思考の単純化）。最終連で死んだ花にじかに呼びかけるとき、花の香りを軸に花と詩人が倫理的に結びつき、詩人は人生の短さを謙虚に受け容れる。香り高い人生は死を超えるのであり、ここには美と倫理の結合が読みとれよう。この詩の解釈に瞑想の手順を導入するのは¹⁵⁾ 適当とは思えない。

過去のまちがった死の見方とキリスト復活によるそれとを区別する「死」(Death) は、死に呼びかけながら詩人の感情よりは距離をおいた姿勢がまさる。洞察と説得性には欠けるとしても、過去のことを現在の経験のように伝えたり、各連の最後の行に機知のひねりを利かすなど、それなりにおもむきはあろう。「私たちは急に飛び出すお前のこちら側を眺めていた／そこには巢立ちした魂の／あとに残った殻があった／涙を流さずに人から涙をゆずる乾いた塵が」(We lookt on this side of thee, shooting short; / Where we did finde / The shells of fledged souls left behinde, / Dry dust, which sheds no tears, but may extort)。それが死人の中からよみがえった救い主の死により、現在では死は装いを一変して美しく歓迎すべきものとなったのであり、結びの連にはよみがえりの信仰と永遠の静けさが具現されているようだ。

「マタイ伝」第 13 章 45 節¹⁶⁾ という添え書きのある「真珠」(The Pearl) は、ハーバートの世俗拒否の態度を力強く描き出した作品。聖書のパラブルの説く真珠を買うために彼が売ったのは学問、栄誉、快楽の道であり、快楽に関する第 3 連は、「私は快楽の道を知っています、その快い緊張／その和らぎとそのうま味を」(I know the wayes of Pleasure, the sweet strains, / The lullings and the relishes of it) と始まり、「それでも私はあなたを愛します」(Yet I love thee) と 1, 2 連と同じリフレインで終える。この初めの 2 行は音楽的なイメージリーだけでなく、性的な意味も含むと考えられるほどニュアンスに富み、リフレインは最初の連ではいささか強引の感がするが、2 連から 3 連へとこの単純な醒めた主張を軸に、詩は力を増しながら展開していく。1, 2 連の分析的な論議が、3 連では洗練された思考と詩人の直接的な感情を加味し、次のまとめの連で問題の中心が明確になり、「だが私の卑しい才知ではなくて、天から私に降ろされた／あなたの絹のより糸が、こうした迷路をぬけて／私を導き、それを頼りにあなたのものへと昇る／その仕方を私に教えてくれました」(Yet through these labyrinths, not my groveling wit, / But thy silk twist let down from heav'n to me, / Did both conduct and teach me, how by it / To climbe to thee) と結ぶ。詩人の経験の根本に関係

する論議であり、詩人が詩の言葉と一つになって、アリアドネーの糸を連想させる神の糸の導きのままに結論に達したようだ。真珠を手に入れる、つまり神のもとへ至るには、神への一途の愛と神からの恵みが欠かせない。

機知の妙をもって世俗と超俗を対決させてみせた「即妙の応答」(*The Quip*)では、「美」「お金」「栄誉」「機知と会話」が誘惑しようとする。これらは詩人の内面に関するものであり、詩はその内面での論議の展開と考えてよい。いずれの誘惑者の働きかけも黙って無視して、「だが主よ、あなたが私に代って答えて下さるでしょう」(*But thou shalt answer, Lord, for me*)と、「詩篇」第38章15節¹⁷⁾に典拠の単一の返答を繰り返す。俗世に背を向けて神に返答をまかせるのだが、この威厳あるリフレインが誘惑者たちの悪ふだけの場ちがいを印象づける。最後の連は——「でもこれらすばらしいやつらに答えようとの／あなたのお定めの時がきましても／詳しくはおっしゃらずに、私はあなたのものだ、と言って下さい／そうすれば彼らは返答をずばり得るのです」(*Yet when the houre of thy designe / To answer these fine things shall come; / Speak not at large; say, I am thine: / And then they have their answer home*)と。神に委ねられる完全な最終解答は、ちょっと休止をおいて‘I am thine’と簡潔に提示される。詩人の機知の巧妙さ、キリスト教の立場の揺るぎなさとともに、この言葉は神の愛をにおわさずにはおかない。

「首輪」(*The Collar*)は反抗的な論議と激越な調子で知られる。表題は神への奉仕または聖職が課する規律を象徴し、詩はそれから免れたいとの願望を扱ったもの。‘choler’(かんしゃく)をぶちまけた末に、‘caller’(呼ぶ者)の声を聞くという地口も、一般の指摘の通りであろう。また「マタイ伝」第11章28-30節¹⁸⁾を連想するのが適切と思われる。回顧する話者の話——‘No more’(l. 1)から‘his load’(l. 32)まで——が、前後を物語の枠づけに囲われた形式をとっているが、この内部の話は過去の経験の現在化という効果をもつ詩的フィクション。その秩序のなさが暗黙の自己批判を示すと見てよいであろう¹⁹⁾。

I struck the board, and cry'd, No more.

I will abroad.

What? shall I ever sigh and pine?

My lines and life are free; free as the roe,

Loose as the winde, as large as store.

Shall I be still in suit?

Have I no harvest but a thorn

To let me bloud, and not restore

What I have lost with cordiall fruit?

Sure there was wine

Before my sighs did drie it: there was corn

Before my tears did drown it.

Is the yeare onely lost to me?

Have I no bayes to crown it?

No flowers, no garlands gay? all blasted?

All wasted?

〔私は卓をたたいて叫んだ、もう結構／私は外に出よう／なに？ いつもため息をつきわずらわねばならぬのか？／私の運命も暮しも自由だ、道路のように自由で／風のようにとらわれず、貯えのように豊かだ／私はいつも仕えておらねばならぬのか？／私の血を流すいばらのほかには／なんの収穫もなく、また私が失ったものを／強壯の果実でとりもどすことではないのか？／私のため息で干上がる前は確かに／ぶどう酒があったし、涙で水びたしになる前は／麦だってあったのだ／歳月は私にとって全く空しかったのか？／それを飾る月桂冠はないのか？／花もなく、華やかな花輪もなく、すべては枯れ／すべては荒れ果ててしまったのか？〕

聖餐の卓 (board) をたたいて、外に (abroad) 出よう、道はずれて道 (rode) のように自由になろう、神の道の拘束を脱して世俗の道の自由を選ぼうと叫び、ため息ばかりついて主に仕える、そういう実りのない生活からの脱出宣言をするのだ。これにつづく内部の声の後半は、これまでの激情よりも理知がまさる（一人称から二人称、そのあと三人称への転換に注意）。こうして死の表徴の髑髏（されこうべ）を回収して信仰の基本の恐怖を拒否し、我慢の重荷 (load) から解放されようというところまでいくのだが、そこで話者に主 (Lord) の声がするという運びである。

But as I rav'd and grew more fierce and wilde

At every word,

Me thoughts I heard one calling, *Child!*

And I reply'd, *My Lord.*

〔しかし私がひと言しゃべるごとに／ますます荒々しくわめき狂ったとき／「子よ」、と呼ぶ声が聞こえたように思われた／そこで私は、「主よ」と答えた〕

話者は衣がえしてこれまでの話に批判をもって現われ、やましい意識を伴っていたはずの反抗的な態度の愚かさが、最後の瞬間に暴露する。やさしく咎める神の声に答えて「主よ」と思わず言う自然さが、本能的な自我から本来あるべき自我への転換をうら書きし、ここに神との関係が新たに確認されて、神の意志に服従するという調和を見出したと言えよう。

「滑車」(*The Pulley*) はギリシャ神話のパンドラの箱の物語を、キリスト教の天地創造の神話に移し変えた作品。人間の安らぎのなさこそ、人間を神に引き上げるべく神慮によってもくろまれた滑車だというのである。神は人間に「力」「美」「知恵」「名誉」「快楽」を注ぎこんだが、恵みのガラスの底に「安らぎ」(*rest*)を残したまま(パンドラの箱の場合は希望)、どうしてそれを与えるのをさし控えたのか。

For if I should (said he)
Bestow this jewell also on my creature,
He would adore my gifts in stead of me,
And rest in Nature, not the God of Nature:
So both should losers be.

Yet let him keep the rest,
But keep them with repining restlesnesse:
Let him be rich and wearie, that at least,
If goodnesse leade him not, yet wearinesse
May tosse him to my breast.

[もしも私が(と神は言われた)／この宝も人間に与えてしまうならば
／彼は私ではなくて私の贈りものを崇め／自然を造った神ではなくて、
自然のうちに安らぐだろう／そうなれば神も人間も損失者となってしまう
／だけど残りは人間にもたせておくが／じれったくなる安らぎのなさ
でもたせておこう／彼を豊かにして飽き飽きさせよう、たとえ善良さが
／彼を私の胸に導かなくても、せめて飽き飽きした気持ちが／彼を私の
胸に投げ上げるように]

冷たい理屈から暖かい計らいへの展開である。‘rest’(残り)を手にししながら‘rest’(安らぎ)を得ない‘restlesnesse’が、‘repining’の修飾で強烈さを増し、それが押韻する究極の幻滅をもたらす‘wearinesse’によって人間が‘tosse’される末尾の‘my breast’には、この世の荒海で難破した者がうち上げられる最後の避難所の意味が否定できない²⁰⁾。「マタイ伝」第11章28節²¹⁾と連関するであろうし、アウグスティヌスの『告白』の巻頭の章の‘our heart is restless until it finds rest in Thee’(私たちの心は、あなたのうちに憩うまで安らぎを得ない)と直接呼応するであろう。神の意志に関するフィクションが、最後に人間存在は神に救われるまでは安らぎを得ないというキリスト教の教義と結合し、こうしてなぞ解き神話の詩的フィクションの枠の中で、信仰上の真実が明かされている点が興味深い。

「花」(*The Flower*) はすぐれた抒情詩として評判が高い。再生の経験を中心テーマに神の力と神の愛を歌う。最初の連は主の再来のさわやかさを春の花にたとえた賛歌、次の連では再生前の「私のしなびた心」(*my shrivel'd heart*) を、咲き終わって地中にこもった花になぞらえる。その描写が「世の中とは縁を絶って、人に知られず引きこもる」(*Dead to the world, keep house unknown*) というふうに、人間的な色合いを濃厚にしたところで、これらを総括する第3連で次のように生と死の対照をきわ立たせる。

These are thy wonders, Lord of power,
Killing and quickning, bringing down to hell
And up to heaven in an houre;
Making a chiming of a passing-bell.
We say amisse,
This or that is:
Thy word is all, if we could spell.

[力の主よ、これこそあなたの驚異の業(わざ)／ひと時のうちに殺してはよみがえらせ／地獄に落としては天上へ引き上げ／弔いの鐘も楽しい鐘の調べに変えたもう／これやあれがそれだけで存在すると／私たちは誤って言う／私たちが解き得るならば、お言葉がすべてなのに]

気まぐれな暴君のように神の力が猛威をふるう('Killing and quickning' の k 音の強いひびきに注意)が、結局はそれぞれの存在を定めている神の言葉の受けとり方の問題、それが理解を超えるのである(この連の 'ing' の連発が次の連に継がれる)。4連では詩人は変化を超越して「あなたの楽園」(*thy Paradise*)に根づくことを切願し、「天を目ざし、その方へ伸びかつもだえつつ」(*Offring at heav'n, growing and groning thither—g 音と iq 音が自嘲的にひびく*)と歌って、自分の花の罪に言い及び、5連では「天が自分のものであるかのように」(*as if heav'n were mine own*)まっすぐに上を目ざすとき、「あなたの怒り」(*Thy anger*)が降りかかると述べる。こうして変化が罪と罰によるものと把握され、次の6連で冒頭の喜びが発展的に確認される。

And now in age I bud again,
After so many deaths I live and write;
I once more smell the dew and rain,
And relish versing: O my onely light,
It cannot be

That I am he

On whom thy tempests fell all night.

〔今こうして年老いて私は再び芽を出す／幾度かの死の後に私は生きて
書く／今一度露と雨の匂いをかぎ／詩作を楽しむ。おお、私の唯一の光
よ／そんなことはあるはずがない／この私があの人／あなたの嵐が夜通
しその上に吹き荒れた同じ者だとは〕

こうして再生の中に死が組みこまれる。喜びと悲しみの両極を経験した自分が同一人だとは思
えないのだが、すべては神の手のうちにある。

These are thy wonders, Lord of love,

To make us see we are but flowers that glide:

Which when we once can finde and prove,

Thou hast a garden for us, where to bide.

Who would be more,

Swelling through store,

Forfeit their Paradise by their pride.

〔愛の主よ、これこそあなたの驚異の業（わざ）／私たちが音もなく去
る花に過ぎぬことを知らせるための／私たちがひとたびこれを知り経験
することができれば／あなたは私たちが留まる庭を用意される／豊かな
富のために思い上がり／さらに多くを望む者は／その高慢さで楽園を失
う〕

詩人の認識の進展に伴って今や力の神が愛の神となり、生死の変化に融和が見出される。‘but
flowers that glide’ という生死を超脱する humility の表現が究極の結論であり、ここに精神
内部の永続的な楽園が期待される。厳しい説教口調の最後の3行——ここには前出の ‘shoot
up’ (l. 24), ‘bud’ (l. 36) などとともに性的なイメージあり——は確かにこの再生を歌った詩
のきずがちがないが²²⁾、それほど人生の暗い面が詩人にのしかかっているということだろ
う。

神との完全な関係を望む姿勢は「靈石（エリクサー）」(*The Elixir*)²³⁾に明らか。詩人は「常
にあなたを優先させて／それを完全に果たすように」(still to make thee prepossess, / And
give it his perfection) 神に教えを乞う。知的な内省から転換して錬金術の隠喩を使い、あら
ゆるものが神に与り、「あなたのために」(for thy sake) という「精分」(tincture) で ‘bright
and clean’ にされ得ると、内部から一新する恭順の態度を示し、「卑しい仕事を聖なるものに
する」(Makes drudgerie divine) 下僕の立場に立って、神の掟のための部屋の掃除で行為も

‘fine’になると主張する。最後は「これこそすべてを金に変える／あの有名な石／神が試金石でためして金と認めたもうものは／より低く値踏みされることはあり得ぬから」(This is the famous stone / That turneth all to gold: / For that which God doth touch and own / Cannot for lesse be told)と控えた表現でおさめて、霊石の隠喩による調和ある神との関係が定着する。

ここで司祭の生き方を問題にする2編の作品に触れておきたい。まず「教会の窓」(*The Windows*)はどうか。「主よ、人はどのようにしてあなたの永遠のお言葉を説き得るのでしょうか?／人はもろいきず入りのガラスです」(Lord, how can man preach thy eternall word? / He is a brittle crazie glasse)と始める。このような人間が聖堂の窓となる地位につくのは、神の恵みによるのだが、その光輝が尊いものになるためには、さらに神が「ガラスにあなたの物語を焼きつけて／あなたの生が聖なる説教者のうちに／輝くようにする」(anneal in glasse thy storie, / Making thy life to shine within / The holy Preachers)のでなければならない。ガラスのイメージで一貫しているこの詩の前半で、神への二人称が姿を消して話が一般化し、1,2連に見られた否定的な表現(1.2, 1.10)が、次のような結び方に展開するのが気になるところ。「教義と生、色と光、これらが一つに／結びつき混じり合うとき／強い尊敬と畏敬の念をもたらず。だが話すだけでは／燃え上がる火のように消えてしまい／耳に良心の鐘をひびかせはしない」(Doctrine and life, colours and light, in one / When they combine and mingle, bring / A strong regard and aw: but speech alone / Doth vanish like a flaring thing, / And in the eare, not conscience ring)と。説教者における教義と生、聖堂の窓における色と光の結合には、キリストに倣うべきだとの義務が含意されていることは、『聖堂の司祭』²⁴⁾からも明らかだ。生きざまを強調するこの積極面の叙述に対するに、花火のように消える不名誉な面の表現は、説教者としての不適任を自省するのみでなく、他の説教者批判もほのめかすであろうか。

反復の形式の整然とした「アロン」(*Aaron*)は、5連すべての脚韻に同一の5語を用い、各連の3行目に音楽のイメージを導入し、これらの反復の対照と対立、それに反響音の変化がもたらす表現上の進展に見るべきものがある²⁵⁾。冒頭の連は「出エジプト記」第28章に基づいたアロンの描写。2連目では詩人自身に関してそれと反対の装いを対置し、「激情のざわめき」(A noise of passions)に言及して自己批判の不調和音をひびかせる。3連では自分には‘another head’が存在するを言い、4連で‘my onely head’のキリストが身代りとして浮かび出る。「もはや私ではなくて、キリストが私のうちに生きている」(「ガラテヤ書」第2章20節²⁶⁾)とのパウロの逆理であり、これを踏まえて最後の連でキリストとの一体が実現する——「私の頭は聖らか／私の胸は完全で明るく／私の教義はキリストが調律される(私が休息する間も／キリストは私のうちに死なないで生きていたもう)／人々よ来い、アロンは装えり」[So holy in my head, / Perfect and light in my deare breast, / My doctrine tun'd by

Christ, (who is not dead, / But lives in me while I do rest) / Come people; Aaron's drest) と。これは冒頭の連の確認の意味の書きなおしで、自我をなくしてキリストを身につける、つまり自我がキリストの中に没し去ることにより、生まれ変わった人間として真のアロンが登場したことを意味する。ここには「ロマ書」第6章4—11節にあるように、キリストとともに死人の中からよみがえる（バプテスマに関する）教えが与っているだろう²⁷⁾。罪の死からのよみがえりが、キリストのあがないによるとの救済の思想である。

「愛(Ⅲ)」Love(Ⅲ)は「教会」の最後の詩で、ハーバートの真髓を示すものと評価されてきた。神との対話から成るパラブルのうちに、聖餐にあずかる意味よりはむしろ、魂が天国に迎え入れられる模様が簡潔に戯曲化されている（主要典拠は「ルカ伝」第12章37節²⁸⁾）。主人と客の枠組みが、やさしい神の愛と卑下する人間の罪とのコントラストを浮き彫りにする。

Love bade me welcome: yet my soul drew back,
 Guiltie of dust and sinne.
 But quick-ey'd Love, observing me grow slack
 From my first entrance in,
 Drew nearer to me, sweetly questioning,
 If I lack'd any thing.

A guest, I answer'd, worthy to be here:
 Love said, You shall be he.
 I, the unkinde, ungratefull? Ah my deare,
 I cannot look on thee.
 Love took my hand, and smiling did reply,
 Who made the eyes but I?

Truth Lord, but I have marr'd them: let my shame
 Go where it doth deserve.
 And know you not, sayes Love, who bore the blame?
 My deare, then I will serve.
 You must sit down, sayes Love, and taste my meat:
 So I did sit and eat.

〔愛は私にようこそと言われた。だが私の魂はしりごみした／塵と罪とに心やましくて／しかし目ざとい愛は、私が最初入ったときから／ぐずぐずするのを見てとって／私のそば近く寄ると、やさしくきかれた／何

か足りないものでもあるのかと／この場所にふさわしい客が、と私は答えた／愛は言われた、君がそれなのだ／この薄情な恩知らずの私が、ですか？ああ／私はあなたを見ることもできません／愛は私の手を取り、微笑んで答えられた／君の眼は私以外のだれが造ったというのか？／その通りです、主よ、しかし私はそれを傷めてしまいました。私の恥を／似つかわしいところへ行かせて下さい／君は知らないのか、と愛は言われる、だれがその責めを負ったかを？／ああ、それでは私が給仕をします／君は席について、と愛は言われる、そして私の食事を味わうのだ／そこで私は坐って食べた]

最初の連の物語の枠づけから2, 3連へとスムーズに対話形式に移り、最終行が物語の完成を明示して結ばれる。愛の神は歓迎の意、接近、接触とますますやさしさを深めて（‘quick-ey’d’ ‘sweetly’ ‘smiling’ 等に注意）ついには贖罪に言い及ぶのに対して、客の話者は逃げ腰で神に応答しながら、罪の意識と親愛感を吐露し（‘Guilty of dust and sinne’ ‘the unkinde, ungrateful’ ‘Ah my deare’ ‘My deare’），そして humility の果てに神の言いなりに従う。神の方が ‘serve’ するのであり（「ルカ伝」第22章27節²⁹⁾が典拠），こうして「自分を低くする者は高くされる」（「ルカ伝」第14章11節³⁰⁾）との教えが実を結ぶ。想像的対話とも言うべきやりとりの中に神の愛の真実性を描き上げ、虚構と信仰の結合が一つの全体として成就していると言えるのではなかろうか。

ハーバートの詩は虚構に満ちている、むしろ虚構そのものと言ってよいかもしれない。詩の虚構が終結するとき、信仰の真実があとに残るというのが主だった傾向のように思われる。虚構の中で自我の没却と humility の深化が進み、宗教的真実の照明とともに、再生を指示する沈黙の中へ詩は姿を消す。ハーバートの場合、humility の志向がそのまま詩論であるとの見方もできようし³¹⁾、また彼の詩の首尾一貫しない非連続性に、精神生活の激しい動揺を再現しようとする「心理的リアリズム」を読むのは³²⁾、その詩の非個性的な特質を前提とする限り妥当な解釈であろう。

※ ※ ※

本稿のために使用した作品集は次の通り。

The Works of George Herbert, ed. F. E. Hutchinson, corr. ed. (Oxford, 1945)

註

1) J. Summers, *George Herbert : His Religion and Art* (Harvard University Press, 1954), p. 141.

2) 「詩篇」第51篇17節—‘The sacrifices of God are a broken spirit: a broken and a contrite heart, O God, thou wilt not despise.’

- 3) キルケゴール『キリスト教の修練』第三部（白水社『キルケゴール著作集』17, 杉山好訳, p. 293）参照。
- 4) L. L. Martz, *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century* (Yale University Press, 1954; rev. 1962), p. 135.
- 5) A. Stein, *George Herbert's Lyrics* (Johns Hopkins Press, 1968), p. 184.
- 6) B. L. Harman, *Costly Monuments: Representations of the Self in George Herbert's Poetry* (Harvard University Press, 1982), p. 81.
- 7) A. Stein, *op. cit.*, p. 185.
- 8) 「ロマ書」第5章8節—'But God commendeth his love toward us, in that, while we were yet sinners, Christ died for us.'
- 9) C. Bloch, *Spelling the Word: George Herbert and the Bible* (University of California Press, 1985), p. 249. 「詩篇」第57篇8節(AVではなくて祈祷書の「詩篇」に拠っている)—'Awake up my glory, awake Lute and Harpe: I my selfe will awake right earely.'
- 10) *ibid.*, pp. 87-90.
- 11) A. Stein, *op. cit.*, p. 177.
- 12) *The Works of George Herbert*, *op. cit.*, p. 278. なお下記もこれに言及している。
R. Strier, *Love Known: Theology and Experience in George Herbert's Poetry* (University of Chicago Press, 1983), p. 198.
- 13) R. Tuve, *A Reading of George Herbert* (University of Chicago Press, 1952), p. 190.
- 14) H. Vendler, *The Poetry of George Herbert* (Harvard University Press, 1975), pp. 18-19,
- 15) L. L. Martz, *op. cit.*, p. 58.
- 16) 「マタイ伝」第13章45-46節—'Again, the kingdom of heaven is like unto a merchant man, seeking goodly pearls: Who, when he had found one pearl of great price, went and sold all that he had, and bought it.'
- 17) C. Bloch, *op. cit.*, p. 15. 「詩篇」第38章15節（祈祷書の「詩篇」に拠っている)—'For in thee, O Lord, have I put my trust: thou shalt answer for me, O Lord my God.'
- 18) 「マタイ伝」第11章28-30節—'Come unto me, all ye that labour and are heavy laden, and I will give you rest. Take my yoke upon you, and learn of me; for I am meek and lowly in heart: and ye shall find rest unto your souls. For my yoke is easy, and my burden is light.'
- 19) J. Summers, *op. cit.*, p. 92.
- 20) H. Vendler (*op. cit.*, p. 36) が『聖堂』に含まれていない詩「忍耐」(*Perseverance*) の最後の連 (*The Works of George Herbert*, p. 205) を引用しているのは適切。この詩は 'Thou art my rock, thou art my rest' で結ばれる。
- 21) 上記18) に記載。
- 22) H. Vendler, *op. cit.*, p. 53.
- 23) もとの題名は 'Perfection'。F. E. Hutchinson はこれほどハーバードの修正の手腕を示す詩はないと書いている (*The Works of George Herbert*, p. 541)。
- 24) 例えば 'The Duty, in that a priest is to do that which Christ did, and after his manner, both for Doctrine and Life' (*The Works of George Herbert*, p. 225)
- 25) A. Stein, *op. cit.*, p. 149.
- 26) 「ガラテヤ書」第2章20節—I am crucified with Christ: nevertheless I live; yet not I, but Christ liveth in me...

27) H. Vendler, *op. cit.*, p. 119.

28) 「ルカ伝」第12章37節—‘Blessed are those servants, whom the lord when he cometh shall find watching: verily I say unto you, that he shall gird himself, and make them to sit down to meat, and will come forth and serve them.’

29) 「ルカ伝」第22章27節—‘For whether is greater, he that sitteth at meat, or he that serveth? Is not he that sitteth at meat? but I am among you as he that serveth.’

30) 「ルカ伝」第14章11節—‘For whosoever exalteth himself shall be abased; and he that humbleth himself shall be exalted.’

31) R. Tuve, *op. cit.*, pp. 194-95.

32) J. Summers, *op. cit.*, p. 87.